

---

# 人形の話

箱亀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人形の話

### 【Nコード】

N3063P

### 【作者名】

箱亀

### 【あらすじ】

とある人形師が作った数体の不思議な人形の話。

まるで御伽噺のような不思議な不思議なお話。悲しい恋もあれば美しい恋もある。

これはそんな普通でない人形達とかかわった人々の御伽噺である。

## 人形師と御伽噺の話

昔々、一人の可笑しな人形師がいました。

その人形師の作る人形は普通の人形とは違い、言葉を喋る人形でした。

いつしか人形師は死んで、人形達は様々な場所に落ちつきました。

あるモノは王国に。

あるモノは街に。

あるモノは村に。

様々な人々に人形達は出会いました。

そして恋に落ち

愛を知り

人を信じ

裏切りに涙し

悲しみを感じ

憎しみに支配され

されど愛しさを持ち

慈しみを浮かべる。

これはそんな伝説のような御伽噺おとぎばなしの序章にすぎません。

## 白い人形の話（前書き）

悲しい愛の御伽噺。

残酷な描写もございますので閲覧にはご注意ください。

## 白い人形の話

白いドレスを着た可愛らしい人形は平和な王国にありました。

人間の子供程ある体躯と長く波打った金色の髪。空を思わせる青い瞳。透き通るような白い肌。いつも顔は笑顔を浮かべ。王様にも家臣にも街の人にも愛されていました。

白い人形もそんな人間の全てを大事に思いました。

小さな人間程度の体躯を持つ人形は一人で歩く事が出来ました。テコテコと歩くその姿はそれはそれは可愛く、振りまく笑顔で見る人間を幸せにしていました。

人形が街を歩いていると、一人の男にぶつかりました。

男は咄嗟に出した手で人形を救い、助けた後に申し訳なさそうに謝りました。

何度も何度も謝っている人間の男を見ると、白い人形はおかしくなって笑ってしまいました。

男は少しムツとして、しかし情けない顔は直らずに白い人形に言いました。

「どうして笑うんだい？」

白い人形は口を少しだけ抑えて、漏れ出す笑いを我慢しながら可愛らしい口を開きました。

「アナタが面白いから笑うの」

嘘の吐けない白い人形はやはり笑顔でそう言った。  
そんな可愛らしい事を言った白い人形に男は眉をしか顰めて溜息を吐

きました。

「キミを汚すと心が痛む」

白い人形は男に抱き上げられ、咄嗟に男の首にしがみ付きました。咄嗟の事だったので、白い人形自身も驚き近くにある男の顔に少し顔を赤らめて、俯きました。

男はそんな事を全く察することは無く、人形を城に送り届けました。

幾日か過ぎ、また白い人形は街へと行きました。

笑顔で街の人に挨拶をして、愛らしい瞳をキョロキョロと動かして何かを探していました。

探し人が見つかりと声をかけてさらに幸せそうに笑みを浮かべます。

白い人形は、恋をしてしまいました。

自分を助けた、あの男に。

平民の男に恋をしてしまった白い人形。

平民の男を愛してしまった白い人形。

しかし、男は白い人形に応えませんでした。

男が悪い訳でもなく、白い人形の性格も容姿も悪くはありませんでした。

白い人形が人形だからです。

可憐な白い人形は考えました。

どうすれば彼に愛されるだろうか。

どうしたら彼の愛に応えられるだろうか。

そして白い人形は思いついてしまいます。

「わたしが人間になればいい」

思いついた人形はさっそく男に尋ねました。

「わたしが人間なら貴方はわたしを愛しますか？」

男はしばしキョトンという顔をして、そして白い人形には遠く及ばないながら爽やかな笑顔で愛おしい人形に頷きました。

白い人形は嬉しくてたまりません。

自分の愛に応えてくれる愛しい人。

そんな白い人形は必死に人間になる方法を探しました。

本を読み、人に聞き、動物達にも問いかけました。

そんな王国に一人の魔導士と黒い従者がやってきました。

魔導士はどんな事でも知っていると有名でした。

そんな魔導士に白い人形が好きな王様は聞きました。

「人形を人間に出来る術を知らないか？」

魔導士は幾分か顔を険しくしてから答えました。

「あまり勧めないがあることは、ある」

さっそく王様は魔導士にその方法を聞きだしました。

魔導士はあまり知られたくないと言い、王様にコツソリと囁きました。

「白い人形よ。なぜ人間になりたいんだ？」

王様は白い人形に疑問をぶつけました。

白い人形は嘘も吐かず、王様に正直に話してしまいます。

「恋をした、愛した、わたしは彼を愛したい」

そんな白い人形に王様は激怒しました。

なぜ私ではない！一番お前を愛していたのは私だ！

白い人形は温厚であつた筈の王様に怯えます。

王様は近くにいた兵士に命令を下しました。

「平民の男を連れてこい」

白い人形は固まりました。まるで時間が止まったかのように、何も聞き入れません。

同時に白い人形は知らず知らずの内に走りだしました。男を助けるために。

何度も転げて、ドレスを汚し、肢体を削り、人形は走りました。人形でしか通れないような近道を使って、兵士より先に男の家に着くことができた人形は急いで男に知らせました。

「逃げてください！ここに兵士が来ます！」

男は啞然として、何かを悟るように頷きました。

「愛しているよ、白い人形」

そして男は白い人形を抱きしめました。男はこうなる事がわかっていました。

人形を愛してしまえば王様は黙っていない。  
そうなれば自分を捕まえに来るだろう。

しかし、男は逃げませんでした。

白い人形だけを置いて逃げる選択が出来ない程男は白い人形を愛していました。

一緒に逃げて、逃げ切れるとも思っていないませんでした。

だから男は白い人形を力いっぱい抱きしめました。  
もう伝えることのできない愛を全て伝えるように白い人形に抱きしめました。

兵士がやってきたのはすぐ後の事でした。

男は白い人形を兵士に優しく渡して、自らの足でお城に向かいま

した。

白い人形は涙の流れる事のない瞳を擦り、嗚咽し、悲しみました。悲しんでいる人形を抱き上げた兵士は男の後ろを着いて行くようにお城に戻ります。

戻ったお城では男の裁判が開かれていました。

「王様、なぜ私は裁かれるのでしょうか？」

男は目の前にいる王様に問いました。罪人の証である手枷を付けながら男は再度口を開きます。

「王様、私の罪は一体何なのですか？」

王様はしばし考えた後に低い声でこう言いました。

「私の白い人形を愛したからお前は裁かれる」

その言葉に男は少し考えた後に問いかけました。

「白い人形を愛していないと言えば、罪にはならないのですね？」

白い人形はその言葉を聞いて、悲しみながらも安堵しました。そう言えば、愛する人は生きることができる。

「私は白い人形を愛しています。白い人形をモノと見ているアナタにはわからない程、私は彼女を愛しています」

男はそう言い切りました。自らを偽ることなく。  
そして白い人形は嬉しさと一緒に叫んでしまいました。

「ダメッ！」

「殺せ」

その声と王様の低い命令は同時でした。

男は白い人形の方を向き、申し訳なさそうな顔をして、剣で貫かれてしまいました。

ドシャリと倒れた男に白い人形は駆け寄りました。  
何度も、何度も何度も謝り、男を抱きしめました。

男はそんな人形をクスリと笑い、申し訳なさそうに最後の力で口を開きます。

「笑って、愛しい人」

そう言って白い人形の頬を撫でた手は、ついに力を失い、地面に落ちました。

白い人形は叫びました。

悲しみも悔しさも憎しみも全部全部まとめて叫びました。  
白いドレスを真っ赤に染めて、男を何度も抱きしめました。  
自分を人と呼んでくれた愛しい人のために涙を流しました。

大切な人の命が必要。

それが魔導士の言う人形が人間になる方法でした。

白い人形は涙を流して、必死に笑って、男に囁きます。

「涙が流れたわ、アナタを愛する資格よ」

しかし、男は笑顔さえも見せません。

人形はもう一度だけ、強く強く、男を抱きしめました。

「いない！アナタのいない世界なんていない！」

そして赤いドレスを纏った人間は叫びました。

男に刺さる一本の剣を見て、彼女はそれを引き抜きます。

「王様、わたしはあなたを愛することができません。これは罪ですか？」

目の前にいた王様はそんな赤い人間に首を振り、否定をします。

「ならわたしはこの人を追いかけます。読ませていただいた本の中にあつた通り。愛する人を追いかけます」

赤い人間は剣の先を自らの胸に押しあて、男を見て愛らしく笑いしました。

## 黒い人形の話（前書き）

純粋な愛……？な御伽噺。

## 黒い人形の話

黒いゴシックドレスを着せられた人形は小さな村にありました。

夜のような髪と黒曜石のような吊りあがった瞳。病的に白い肌。人間の幼子程の大きさの黒い人形は感情に乏しく、しかし全ての事を知っていました。

村長の家に置かれていた人形に聞きに来る村人は後を絶ちません。

「この木の実を食べれるか？」

「食べれるが、きちんと茹でなければ渋い」

「息子が消えた」

「夜に家を飛び出る音がした。向かった先は王都だが、数刻すれば馬車に乗って戻ってくる」

人形は淡々とした物言いで全てを答えた。

村人は感謝した。全てを教えてくれる人形を崇めもした。

そして一人の男がついに人形に聞いてしまった。

「全くばれずに犯罪を実行するのはどうすればいい？」

そして黒い人形は手順を一から丁寧に最後までただ淡々と答えた。

男によって犯された罪の数々は村人にさっぱりバレなかった。

ついに男は人形の手順を少し違えた罪を実行した。

ようやく浮き彫りになった犯行。しかし、手順が違えどほぼ完全犯罪だったそれは誰も疑えず、誰もが疑わしいそんな事件になりました。

村人たちはあわてて村長の家に行きました。

そして人形に問いました。

「この犯罪は誰が真犯人ですか？」

人形は答えを渋りました。

真犯人とは実行した男の事なのか。それとも手順を教えた自分なのか。

黒い人形はようやく口を開きます。

「私が方法を言い、男が実行しました」

村人たちは男を捕まえて処刑しました。

そして同時に崇めていた人形に怒りを覚えました。

「アレは不幸を呼ぶ人形だ」

人形はその言葉を理解しました。薄い心を決ったその言葉を奥深くで理解しました。

村人たちは感謝の心を忘れて、しかし恐れから人形を壊すのでは無く、森へと棄ててしまいました。

黒い人形は鬱蒼とした森の中、棄てられた事を理解しました。しかし、なぜ棄てられたかは理解できません。

人形からすれば人に問われ、そして答えただけなのです。人間からすれば犯罪を助長したから、と当然の理由。

そんな黒い人形は一人の少年に出会いました。

人形はその少年の事を知っていました。

村一番の嫌われ者。それが目の前にいる少年でした。

「黒い人形さん。どうしてここに？」

「人間に棄てられたから」

そう呟けば少年は眉を寄せてから人形を拾いました。

人形は小さな体躯を震わせ、拒絶をしました。

乏しい感情が全て疑心に囚われていたからです。

そんな小さな抵抗を少年は無視して自身の家に黒い人形を招きました。

汚れた肢体を丁寧な手つきで洗い、服も綺麗にして、少年は黒い人形を大切にしました。

幾日かそんな一方的な日常を過ごしていた黒い人形は口を開きました。

「アナタはなぜ、私を拾ったの？」

そう聞けば少年は首を傾げて、笑いだしました。

黒い人形は精一杯眉を寄せて不機嫌を表します。少年はそんな人形を見て、すぐに謝りました。

「キミでもわからない事があるんだ」

そんな少年の言葉にハツとした黒い人形は知らない事が少し恥ずかしく顔を赤らめました。

「僕は何も知らないからキミを拾った」

笑いを静めて、少年は真剣な顔で言った。人形はその言葉を聞いてしまった。

そしてこの少年に恩返しをしよう。そう誓いました。

幾年か経ち、少年が青年と呼べる頃。黒い人形は相変わらず青年になった少年に大切にされて小さな小屋にいました。

料理の仕方、食材の見分け方、戦争の勝ち方、逃げ方、魔導と呼ばれる現象の扱い方、御伽噺。黒い人形は持てる知識の全てを青年に教えました。

青年はいつしか、全てを知る魔導士と呼ばれ、人々から尊敬されました。

そんな青年に黒い人形は聞きました。

「村への復讐の仕方は聞かないの？」

「したところで価値はあるか？」

そんな青年の言葉に一切思案せずに相変わらず淡々とした口調で黒い人形は言った。

「ない。微塵も」

「だろう？それに僕は感謝もしている。キミに出会えた」

青年は黒い人形を見つめながらそう言った。

黒い人形は首を傾げてしまい、青年はそれをクスクス笑って見ていた。

「僕は人生の中でキミに出会えたことがもっとも幸福だ」

「なぜ？」

「キミを愛しているから」

愛。という単語を幾回か頭の中で復唱した黒い人形は途端にポンッ、という音を出すかのように顔を真っ赤に染めた。

そして言いようもない幸福感に浸るのと同時に青年に聞いた。

「私は人形よ？」

「僕は人間だ。なら愛しい黒い人形さん。人形を人間にするにはどうすればいい？」

そんな青年に、すこし渋りながら人形は答えた。

「人形の大切な人の命を代償にすれば人形は人間になれる」

青年は啞然として、人形は俯きました。

途端に青年は笑いだしました。まるで可笑しな戯曲を聞いたように。

「なるほど、そういう運命か」

「私は人形、アナタは人間。一生交わることはない運命」

「でも僕はキミを愛せる」

青年はただ、黒い人形を愛したかった。

そして人形もそんな青年に応えたかった。

「一つだけ方法がある」

「どんな方法だ？」

青年はやや噛みつくように黒い人形に迫った。

顔を近づけられ、赤い顔をさらに赤くする黒い人形は小さく、とても小さく呟いた。

「アナタの命を半分もらっ」

「よしそれでいいっ」

青年の決断は早かった。それこそ黒い人形が疑問に答えるような早さだった。

そんな青年を落ちつかせるように黒い人形は言う。

「アナタは残り半分しか生きれない」

「キミがいなければ一秒も百年も変わらない」

「成功しないかもしれない」

「失敗する筈がない」

青年は言い切った。まるでそれがすべてだと言いきるように。

そして青年は黒い人形に魔導と呼ばれる術を施した。

光が黒い人形と青年を包み、辺りがわからないほど強烈に発光する。

「愛してるよ」

「私も愛してる」

そんな一人と一体の囁きが光から漏れ出した。

小さな小屋に一組の男女がいた。

仲睦まじい二人の内一人は全てを知る魔導士。

そんな魔導士の隣にいる黒いドレスを纏った艶やかな黒髪の女性

は口を開いた。

「幸せ、というのかしら？」

「少なくとも僕は幸福を感じてる」

女性を抱きしめてそう囁く魔導士に女性は白い肌を耳までしつかりと真つ赤にしてこう呟いた。

「私、世界が見たいわ。貴方と、どこまでも続く広い広いこの世界の全てを見たい」

「キミが望むのなら」

そう言って抱きしめる魔導士。その魔導士に応えるべく、大きくなつた体躯で背中に腕を回す黒い人間。

少しして、世界を知る魔導士と黒い従者を見かける人々がいました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3063p/>

---

人形の話

2010年12月19日01時42分発行